

財団法人松江市教育文化振興事業団

埋蔵文化財課年報XI

平成18年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

表紙写真：城下町遺跡（殿町287番地）出土遺物

本文目次

第1章 財団法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織	1
第2章 平成18年度の調査概要	3
田原谷遺跡	5
西川津遺跡C区・古屋敷II遺跡	7
大勝間山城跡	8
城下町遺跡（殿町287番地）	9
城下町遺跡（寺本宅跡・だるま堂跡・須田・吉田宅跡地）	11
团原II遺跡・鶴齋山遺跡ほか	12
岩汐窯跡	13
石の堂遺跡	15
新宮遺跡	16
平成19年度調査概要報告 乃木西廻遺跡	17
コラム 岩汐窯跡の発掘調査～岩汐1号窯・岩汐2号窯について～	24
第3章 平成18年度以前の調査	26

挿図目次

第1図 発掘調査成果図	18
第2図 SK01実測図	21
第3図 SK01遺物出土状況実測図	21
第4図 土師器椀・皿出土状況実測図	21
第5図 SK01出土遺物実測図	23



松江市位置図

第1章 財団法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織

- ◇ 設立 昭和51年（1976年） 4月1日
- ◇ 所在地 島根県松江市西津田6丁目5番44号
- ◇ 目的 事業団は、松江市及び松江市教育委員会の基本的施策に即応して、その委託を受けた事業及び市内の教育・文化・スポーツの振興に関する事業を行い、もって市政の発展と市民の福祉向上に寄与することを目的とする。
- ◇ 事業 目的を達成するため、次の事業を行う。
 - (1) 松江市及び松江市教育委員会から委託を受け、または指定管理者として指定された教育・文化・スポーツ等に関する施設の管理運営。
 - (2) 教育・文化・スポーツの振興に必要な事業。
 - (3) その他、事業団の目的を達成するため必要な事業。

◇ 組織

理事長 1名
(市長)

副理事長 2名
(議員・助役)

専務理事 1名

理事 11名
議員 5名
学識経験者 1名
市執行部 5名

監事 2名
(議員・助役)

事務局長

総務課 ————— 執務経理係

スポーツ振興課 ————— 振興係

埋蔵文化財課 ————— 調査係

総合文化センター ————— プラバ係

図書館係

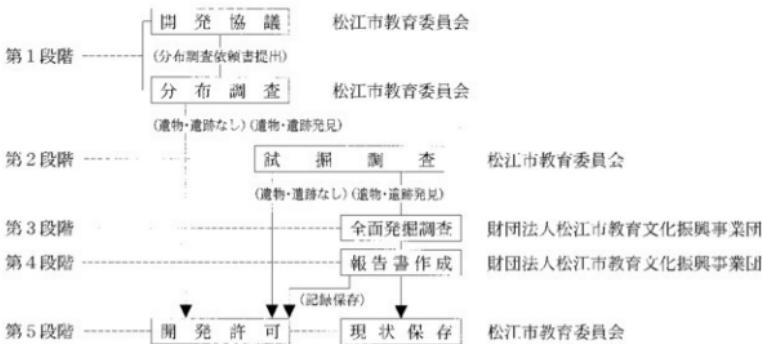
◆ 埋蔵文化財課

- 設立 平成5年7月1日
□ 所在地 〒690-0401 烏根県松江市島根町加賀1263-1
□ TEL 0852-85-9210
□ FAX 0852-85-3611
□ 業務 1) 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
2) 埋蔵文化財課の庶務経理（予算及び決算を含む）に関すること。

◆ 平成18年度 調査職員体制（平成19年3月31日現在）

理事長 松浦 正敬
専務理事 長野 正夫
事務局長 松浦 克司
埋蔵文化財課長 廣江 眞一
調査係長（調査員） 瀬古 謙子
主任 門脇 誠也
主任（調査員） 江川 幸子
主任主任（調査員） 石川 崇 落合 昭久 藤原 哲
嘱託職員（調査補助員） 野津 哲志 野津 里佳 泰 爰子 廣瀬 貴子
山根 英之 三代 正裕 北島 和子 三木 雅子 大森 義和
嘱託職員（事務） 江角 由巳

◆ 松江市埋蔵文化財業務フローチャート



第2章 平成18年度の調査概要

財團法人松江市教育文化振興事業団は平成18年度において、13ヶ所の発掘調査と3ヶ所の報告書作成をおこなった。

発掘調査を実施したのは田原谷遺跡、西川津遺跡C区、古屋敷II遺跡、大勝間山城跡、城下町遺跡（殿町287番地）、城下町遺跡（寺本宅跡地）、城下町遺跡（だるま堂跡地）、城下町遺跡（須田・吉田宅跡地）、鵜瀬山遺跡、団原II遺跡、岩汐窯跡、石の堂遺跡、新宮遺跡である。

田原谷遺跡は松江市春日町地内に位置し、宅地造成に伴い調査を実施したものである。古墳時代前期の土壙墓、土器棺墓と中・近世の建物跡が検出されており、このうち近世の掘立柱建物跡は風土記に記載された田原社との関連が指摘されている。

西川津遺跡C区・古屋敷II遺跡は松江市西川津町の道路工事に伴うもので、西川津遺跡C区においては多量の弥生上器が出土している。調査区付近を流れる朝駒川の流域には周知のとおり、弥生時代の拠点集落の存在が指摘されており、関連が注目される遺跡である。

大勝間山城跡は松江市鹿島町名分に位置し、道路拡幅工事に伴い調査を行なったものである。遺跡は名称のとおり、中世の山城が存在したとされる所で火縄銃の弾等が出土している。その他、弥生時代中・後期の堅穴建物跡が数棟確認されている。

城下町遺跡（殿町287番地）は松江城の東、松江市殿町に位置する松江藩の重鎮家老屋敷跡の調査である。堀尾時代は堀尾修理・堀尾采女、京極時代は佐々九郎兵衛、松平時代は乙部九郎兵衛が本地に屋敷を構えていたことが文献・絵図等でわかっている。江戸時代初期～幕末までの4面に分けられる造構面が確認されており、多種多様な造構と大量の陶磁器、木製品が検出されている。調査は平成19年度も継続して行われる。

城下町遺跡（寺本宅跡地・だるま堂跡地、須田・吉田宅跡地）は松江市母衣町・米子町に位置する城下町遺跡（殿町287番地）と同様、江戸時代の城下町の調査である。それまで湿地帯であった本地にウラジロ（シダ）を敷き沈下を防いだ等、当時の造成工事がわかる貴重な資料が得られている。

鵜瀬山遺跡は大勝間山城跡の東に位置し、弥生時代・古墳時代・中世の造構を検出している。

団原II遺跡は松江市大庭町に位置し、宅地開発に伴う調査をおこなったものである。後世による削平を多大に受けたが土壙と多数の柱穴が検出されている。

岩汐窯跡は松江市大井町に位置し、ため池改修工事に伴い調査をおこなったものである。以前より窯跡数基の存在が確認されているところで、今回の調査において新たに1基の須恵器窯が確認されている。大井窯跡群の一角を成す窯跡地として大変興味深い遺跡である。

石の堂遺跡・新宮遺跡は松江市岡本町に位置し、ため池改修工事に伴い調査をおこなったものである。両遺跡とも土師器等の遺物を包含する自然流路を検出しており、周辺にまだ見ぬ集落跡の存在が指摘される。

この他、平成19年度に調査した乃木西廻遺跡の概要報告を平成18年度調査概要の後に載せている。

平成18年度 調査遺跡位置図

S = 1 : 70,000



田原谷遺跡

[所 在 地] 松江市春日町 455-1他

[調査原因・調査面積] 宅地造成（松江市都市開発公社）・1,100m²

[調査の概要] 本調査地は、県道（城北通り）沿いの田原谷池南側の丘陵に位置する。標高約27mの丘陵上にある南北二つの平坦面とそれをつなぐ痩せ尾根からなる。調査の結果、上坑11基、土器棺墓2基、土壙墓6基、石蓋墓、焼土坑、溝状遺構5条、掘立柱建物跡2棟、ピット群、ピット列を検出した。

<主な遺構と遺物>

○土壙墓（SX02）……… 北部平坦面の北東端で検出した二段掘りの墓壙で、鼓形器台、高坏、甕が出土した。これらの供献土器から古墳時代前期の遺構である。

○土器棺墓（SK06）……… 南部平坦面南西端で検出した遺構である。甕・壺・甕の順に3個体の土器が重なって横倒しの状態で出土し、中央の壺は底が抜けていて、下の甕の口縁が壺の中に入っていた。出土した土器はすべて複合口縁をもつ古墳時代前期の土器である。

○ピット列…………… 南部平坦面の南東側斜面、下端で検出した、7穴連なったピット列である。黄褐色土の上に赤褐色土が円形に堆積していた。ピット周辺に赤土はみられないことから、人為的に埋められたものと考えられる。

○掘立柱建物跡（SB01）… 南東平坦地で検出した東西2間（3.3m）、南北3間（5.5m）の掘立柱建物跡である。10本の柱穴は梢円形や長円形に掘り込まれていた。建物跡中央東寄りの炭の広がりの下から見つかったピットには、赤色顔料を混ぜたような赤色の土が部分的に入っていた。

遺構面に密着した遺物はなかったが、覆土から13世紀代中国製の褐釉壺の底部と胴部片、中・近世の土師質土器皿、鉄釘、17世紀初め頃の肥前系の播鉢などが出土した。出土遺物から中・近世の遺構と考えられる。

調査結果から、田原谷遺跡には二つの時期の遺構があることがわかった。ひとつは古墳時代前期であり、もうひとつは中・近世である。古墳時代前期には調査地全体が墓域であり、その後中・近世に両頂部とも削平され、ピット群やピット列、掘立柱建物跡が一体のものとして造営されたと考えられる。この空間は日常生活に関わる遺構ではなく、非日常的な空間として位置づけられるのではないだろうか。

この田原谷には古くは風土記に記載された田原社があり、近世に奥谷に移された田原神社の元宮があったといわれている。（内田 映『法吉村誌』昭和63年）本遺跡の掘立柱建物跡は田原神社元宮を探るうえで、貴重な資料となりうるであろう。

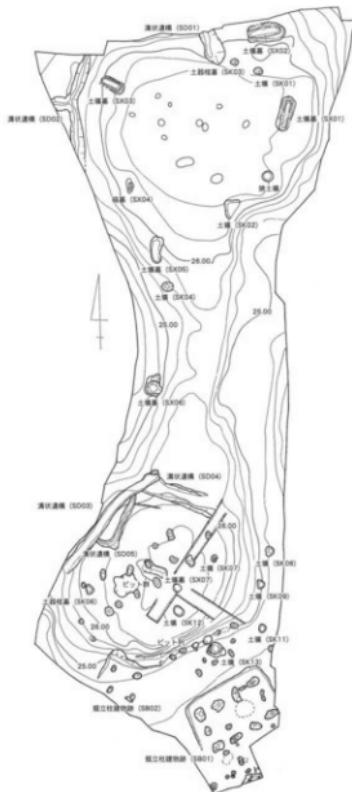
（廣瀬貴子）



土器棺墓 (SK06、西から)



ピット列土層堆積状況



田原谷遺跡・調査成果図 (1:400)



掘立柱建物跡 (SB01)
(南西から)

西川津遺跡C区・古屋敷II遺跡

県道松江島根線西川津工区として松江島根線から国道431号バイパスまでの約9,000m区間の道路延長事業が計画され、松江市教育委員会によって事業区域内の踏査を実施したところ、周知の遺跡二ヶ所（「西川津遺跡」：A～D地点、「堂頭山城跡」：E地点）の他、山林部分（L～V地点）で遺跡推定地が発見され、新たに「古屋敷II遺跡」と命名された。

発掘行政関連での協議の末、このうち平成18年度には財団法人松江市教育文化振興事業団によつて西川津遺跡C区と古屋敷II遺跡の調査が、19年度以降は島根県（埋蔵文化財センター）が調査を担当実施することとなった。

西川津遺跡C区は県道松江島根線西川津工区のうち、朝酌川のすぐ東側に位置する調査区で東西19m、南北19m、調査面積は約380m²である。旧表土の下、標高-0.7m前後から砂層が堆積し大量の繩文土器・弥生土器・土師器が出土し、石器や数点の須恵器も出土した。出土状況から調査地は河川が流れた痕跡であり、顕著な遺構は認められなかったが、遺構としては打ち付けられた杭等を確認できた。

古屋敷II遺跡の現状は山林であったが、調査当初より工事計画が二転三転し、最終的に当初伐採範囲に3分の2である「中央区」と「東区」との発掘調査を実施した。古屋敷II遺跡の東地区は表土直下ですぐ赤土の地山を検出し遺構・遺物はなかった。中央区では10～11世紀前後を主とする土師器・須恵器の包含層と若干の遺構を検出した。

（藤原 哲）



西川津遺跡C区 旧河道出土の杭

大勝間山城跡

県道松江鹿島線拡幅工事が計画されたため、平成18年11月から平成19年1月にかけて3ヶ月間、発掘調査を実施した。調査面積は250m²である。

大勝間山城は、松江市鹿島町名分に所在する中世の山城である。尼子方の家臣が残した『雲陽軍実記』や『朝山家系図』の中にその名が見え、築城主や築城時期そして実戦がおこなわれた事まで知ることができる珍しい山城である。文献と考古の両面からアプローチできる、担当者としては非常に興味深い遺跡である。

しかし、この調査区は大きく分けて3時代の複合遺跡であった。最下の遺構は弥生時代中～後期の住居跡であり、その次に中世の山城がある。山城として明確な遺構は確認できなかったが、山頂から土師皿の破片多数が出土したほか火縄銃の弾1点が出土した。その後、この場所は江戸時代の運河佐陀川開削工事の際に採土場として揚土置場として利用されている。佐陀川開削工事は文献によってよく知られているが、遺構の面から大規模に調査できたのは今回が初めてである。調査区はこのように複雑な状況であったため、協議の結果、平成18年度は調査区の北側約半分についてのみ調査を実施することとなった。

調査の結果、北側半分では、山頂部の浅いレベルから土師皿の破片多数が出土し炭の散乱を確認した。さらに掘り下げるに山側に溝を掘った隅丸方形の竪穴建物を検出した。その遺構の南の少しレベルが下がった地点では、円形竪穴建物跡と隅丸方形竪穴建物跡を検出した。隅丸方形竪穴建物跡の中からは土器類が当時そのままのような状況で出土し、弥生時代後期竪穴建物内での器物の配置を知ることができる良好な史料となるだろう。

(江川幸子)



切り合った弥生時代の竪穴建物跡（奥が中期、手前が後期）

城下町遺跡（殿町287番地）

本遺跡は松江城の東側、殿町287番地に所在する。本調査は松江市の歴史資料館整備事業に伴うもので、試掘調査を含めて平成17年度から継続している。本年度の調査面積は約900m²を測る。

松江藩は3度、藩主が代わっている。まず、1600年に堀尾吉晴が月山富田城に入城する。しかし富田城では近世城下町としては不便と考え、07年から11年にかけて松江に城と城下町を建設し、移り住んだ。その後、藩主が堀尾氏から京極氏に代わり、38年に松平直政が藩主として松江城に入り、以来10代230年間にわたって松平氏が支配し、明治維新を迎えた。

本調査地は江戸時代を通じて松江藩内のNo.2ないしNo.3の家老が配置されており、大変重要な位置であったことが伺える。堀尾時代は「堀尾采女」(4,000石)が、京極時代は「佐々九郎兵衛」(10,000石)が、松平時代は「乙部九郎兵衛」(4,250石)が住んでいたことが絵図等で明らかになっている。

発掘調査の結果、検出された遺構は大きく分けて4つの時期（I～IV期）に分けられる。代表的な遺構をいくつか紹介する。

【I期】は城下町建設以前の湿地帯の上であったと思われる黒色粘質土の上に、地山のブロックを多く含んだ黄色～黄橙色土を盛土して造構を作っている。

SX-18は調査地の南側で並ぶように検出された建築部材を転用して作った木枠造構である。規模は長辺200～300cm×短辺90cmを測る。板材を斜めに内側に入り込むように据え付け、その内側に杭を打ち込んで板材を支えていた。埋土からは手づくね成形の土師質土器や胎土目の跡が残る肥前陶磁、漆器などが出土した。

【II～III期】の遺構は時期の特定には至らなかったが、検出状況から2時期あると考えている。

SX-07は調査区の南西側から検出された石列である。主軸部分は東西方向に走り、長さ約11m、幅約1m、高さは最も石が積み上げられたところで70cmを測る。東側は石が2～4段積み上げられているが、西側に行くにつれて低く雑に積み上げられている。また西端から派生して南側にも石列が2条検出されている。SX-08は調査区の中央南から検出された石組みの遺構である。内法は110×150cm、深さ85cmを測る。石は3段から4段積まれており、さらに内側にはステップ状に石が積まれていた。用途は最下層の堆積土が砂質土であったことから、水に関係することに使われていたのではないかと考えている。この段階の遺物は土師質土器や肥前陶器に加えて肥前磁器も多く出土するようになる。

【IV期】は幕末から明治以降に作られた遺構群で、明確な建物跡を示すような遺構は少なく、掠乱や廃棄土杭が多くかった。この時期になると他地域の搬入品が少くなり、代わって在地の陶磁器類（陶器：布志名焼、磁器：意東焼・塩谷焼）が大半を占めるようになる。

このように各時期にわたって多くの陶磁器類が出土していることに加えて、I～III期の遺構からは多くの木製品も出土している。文献資料ではわかりにくい当時の生活の様相の一端が垣間見ることができる。今後調査区域が南・西側に拡大することから、より多くの情報が得られることが期待できる。

（石川 栄）



SX-08 完掘状況



SX-18 検出状況

城下町遺跡（寺本宅跡・だるま堂跡・須田、吉田宅跡地）

市道北公園線拡幅工事が計画されたため、平成18年8月から10月にかけて3ヶ月間、通称大手前線沿いの互いに離れた3ヶ所について発掘調査を実施した。調査面積は、寺本宅跡地が60m²、だるま堂跡地が102m²、須田、吉田宅跡地が160m²である。

松江城は中世には末次城があった場所で、末次城の周囲は宍道湖が奥深くまで入り込んで湿地域や湖が広がっており自然の要害となっていた。江戸時代に堀尾氏が松江に配されて松江城を現在の地に構えるにあたり、湿地や湖を埋め立てて城下町を造成して現在の松江の基礎ができあがったのである。

3ヶ所を調査する際に主眼を置いたことは、①城下町造成遺構、②武家屋敷遺構、③江戸時代から使用され続けている道路側溝の地下構造の解明等である。

中でも①については非常に興味深い成果を得ることができた。だるま堂跡地では、おもかす層（湿地の藻等が腐りきれずに残る層）上に大海崎石が一部規則的にならべられ、場所によっては単独でも配されていた。これらは造成土が無駄に広がるのを止め、区画ごとに土をつき固めたものと考えられる。また須田、吉田宅跡地では、灰色粘質土上にウラジロ（シダ）を敷き詰めた遺構を検出した。このウラジロ敷の効果は大きく、図面作成作業の際にここへ足をのせると沈むことなく自由に動くことができたのである。身をもってその効果を実感することができた。調査範囲は3ヶ所とも非常に狭かつたが、表面では見られない造成工事の苦労の一端をかいま見ることができたよう思う。

(江川幸子)



須田、吉田宅跡地で検出したウラジロ敷遺構

団原Ⅱ遺跡

団原Ⅱ遺跡は、松江市大庭町字團原に所在する。

団原という字名は奈良時代の意宇軍團に由来するともいわれ、それは『出雲國風土記』の記載とも合致している。この遺跡の東方には出雲國国府跡があるほか周囲には風土記時代の遺跡が数多く存在しており、調査地はまさにその時代のメッカと言っても過言ではない。

ここに、個人によるアパート建設の計画がたてられたため、松江市教育委員会が試掘調査をおこなつた。その結果、ピット少々と須恵器片の出土を確認したため、当事業団が平成18年6月1日から同年7月31日まで約2ヶ月間をかけて本調査を実施した。調査面積は927m²である。

調査地の地形は緩やかに傾斜していたが、実際に掘ってみると、地山斜面がカットされて平坦面が造られていた。カットされた地山直上からは19世紀末頃の陶磁器が多く出土した。そしてカットされた地山の上には軟らかいクロボク層が1m以上載っていた。また、東端部からは天井部を失った茅穴（近世の貯蔵穴）2基や、性格不明の土壙多数、ピット等を多数検出した。

地権者の「曾祖父あたりが大規模に長芋を作つて広瀬まで売りに行つてたんだ。」という話のとおり、検出された遺構はまさに江戸時代末期の穏やかな農村の一角といった状況であった。しかし、遺構を個別に見ると性格不明なものが多かった。今後の調査例の増加や文献、民俗など考古学以外からのアプローチにより、近世農村の復原がもっと具体的にできれば有意義な調査結果となるであろう。

今回は風土記時代の遺構は検出できなかつたが、それは江戸時代末期に大きく地山加工がおこなわれていたためかもしれない。少量の須恵器片も出土しているため、遺構が存在した可能性は否定できない。

（江川幸子）

鶴灘山遺跡ほか

昨年度に引き続き実施した、松江市立鹿島中学校の校地拡大および改築に伴う発掘調査である。調査地は急峻な崖で、調査面積は60m²を測る。

場所は松江市鹿島町名分であるが、今年度発掘調査を実施した大勝間山城跡調査区と同じ山で、北東にわずか50m離れた地点である。調査は、平成18年2月の約7日間実施した。

結果としては、昨年度検出した段状遺構の続きを検出したのみで、新しい遺構、遺物とともに発見することはできなかつた。

（江川幸子）

岩汐窯跡

本遺跡は松江市街地北東の松江市大井町の丘陵谷部に位置し、その一帯は大井窯跡群として多くの須恵器窯が周知されているところである。

調査は溜池整備事業（岩汐池）に伴い工事の掘削範囲及び、溜池整備後の常時貯水面の高さ17.57mまでの範囲を対象とし、平成18年10月20日から平成19年3月23日の間行なった。面的調査の範囲は2,500m²を測る。開発範囲の近くには古くから岩汐窯跡の存在が知られ、本調査においてはその窯跡に付随する遺構及び遺物の検出が見込まれた。

調査の結果、須恵器窯3窯（仮称：A窯・B窯・C窯）、須恵器片・窯体塊等の集積地1所（SX01）、大きな窯体塊の範囲1所、須恵器片を多量に含む帶状の黒色土1条、大木・大形の石・円形状の小石列1所等と、コンテナ300箱に及ぶ須恵器片を確認している。

なお、A窯・B窯は調査対象範囲外であり発掘調査はできなかつたが、記録として露出した断面を実測することができている。（A窯は周知名称の岩汐1号窯・B窯は周知名称の岩汐2号窯と推測される。C窯は本調査で確認した新たな窯跡である。）

〔A窯・B窯・C窯〕

A窯は調査区東側の北側急斜面に断面が露出していた須恵器窯である。残存箇所における窯体幅は2.55m、深さは1.15mを測る。

B窯はA窯から西の方向へ約2m平行移動した崖状の急斜面に位置するものである。残存する窯体幅は2.85m、深さは0.75mを測る。A窯と同様、焼成部の半ばで分断され崩落していた。

C窯は調査区最西部の谷奥のトレンチで確認した須恵器窯である。残存幅は約1m弱を測り、A窯・B窯と同斜面に造られている。このC窯からは6世紀末～7世紀初頭の須恵器壊蓋・壊身片が出上している。

※A窯・B窯の詳細については、本年報の[コラム]を参照。

〔SX01〕

須恵器片・窯体塊等の集積地であるSX01は溜池の中心部からやや東寄りの底面に位置し、水が抜けた状態で初めて顕わになったものである。規模は東西約15m、南北5～6mを測り、中央を頂上部とした山のような形状を成していた。表面は一面須恵器の破片で覆われており、「土器の山」と呼ぶのに相応しい程のおびただしい量の須恵器が見てとれるものであった。

このSX01は遺構としての視点では検討困難である為、遺物を中心に見ざるを得ないものであった。出土した大量の須恵器の時期幅は6世紀前半～7世紀初頭に集約されるもので、当該期が岩汐池の須恵器窯が操業されていた時期と考えられる。また、特筆すべきは須恵器と共に大量に出上した窯体塊である。現在は削平されており旧地形は想像の域を出ないが、仮に削平された部分に窯が存在していたとしたら、削られる際に破壊され、その窯跡片が辺り一体に散布していても不思議ではない。そう考えた場合、SX01は溜池造成時に人々の手によって搔き集められた、現存しない窯の灰原と考えるのが妥当であると思われる。

岩沙窯跡は、大井古窯跡群の中でも大規模な窯跡として周知のところではあったが、実際に調査が行なわれたのは今回が初のことであった。溜池の水を抜いたことによりSX01という須恵器の山が現れ、その年代は6世紀末～7世紀初頭代を示した。また調査範囲外ではあったが、A窯（岩沙1号窯）・B窯（岩沙2号窯）の断面実測を行い、加えてC窯という新たな窯の存在を確認することができた。今回、6～8世紀代に大井古窯跡群の中心を担っていたと思われる岩沙窯跡を調査し、3つの窯、そしてコンテナ300箱におよぶ膨大な量の須恵器・窯体塊を検出した。これらの成果は、岩沙窯の須恵器製作・搬出・流通等の規模の大きさを知る手がかりとなり、また現時点では発掘調査された窯跡が少ない大井古窯跡群の全貌を明らかにする上で、非常に重要で且つ好資料となり得るものと考える。

（秦 愛子・落合昭久）



調査前 全景（中央左に見える小山がSX01）



SX01 堆積土状況

石の堂遺跡

本遺跡は宍道湖北岸、松江市岡本町地内に所在する。宍道湖に向かって伸びる低丘陵に挟まれている小さな谷部に位置し、本遺跡調査範囲の北西側には「石ノ堂池」と称される農業用水の溜池が造成されている。

調査は溜池整備工事内の遺物包含層を有する溜池南東側の旧水田地約280m²範囲において、面的調査とトレンチ調査を併用し行なった。

調査の結果、明らかな遺構を検出することはできなかったが、現地表面より1m程掘り下げたところから遺物包含層と、この層の下位に遺物を包含する自然流路の痕跡を確認することができた。

遺物包含層においては、土師器、須恵器等が多量に出土しており、そのほとんどが平安時代の遺物であった。このうち、土師器は大半が壺で、底部径が小さく、回転糸切り痕を残し、体部は浅いものが多く見られた。また、須恵器は無高台で体部は湾曲せず直線的に延びる形態の壺が多く見られる。

自然流路跡の堆積土からは、IV-1様式とみられる弥生土器の甕・底部片と黒曜石剥片が1点ずつ出土している。この自然流路跡は南北方向に流れていたことが分かるもので、弥生時代中期頃には土器等を含みながら宍道湖に水を注いだ小さな川であったと想像できる。

本遺跡の低丘陵と並行し、宍道湖側へ伸びる東側の丘陵上には、数多くの遺跡・古墳が存在するが、本遺跡周辺での周知の遺跡は皆無に等しい。今回の調査では、明確な遺構を検出・特定するには至らなかったが、8~12世紀代の多量の土師器、須恵器、そして弥生期に存在していた自然流路跡を検出している。明確な遺跡が確認されていないこの丘陵で、弥生土器をはじめ多量の遺物を発見できたことは意義深いことであり、また大きな成果となったと言える。今後、本遺跡を含む低丘陵に遺構の存在が確認され、その詳細が明らかになることを期待する。

(秦 愛子・落合昭久)



出土した須恵器



出土した土師器

新宮遺跡

本遺跡は松江市岡本町地内の宍道湖北岸の南北方向に派生する低丘陵の南東側裾部に位置し、同丘陵の尾根部には「崎山古墳群」「狐松古墳」など古墳の存在が知られている。調査地北西側には「廻田池」と称される溜池が隣接しており、現在畠地となっている調査区及びその周辺は、旧秋鹿小学校の敷地であったことが知られる。

調査は畠地として使用されていた溜池の南東側の約288m²を平成18年6月～7月の40日間を要して行った。

調査の結果、明確な遺構を検出することはできなかったが、現地表面より約1m掘り下げたところから、遺物包含層とその下位に遺物を包含する自然流路跡を検出した。

このうち、遺物包含層は多量の土器を含む粘質層で、出土する遺物のそのほとんどは平安時代の土師器・須恵器であった。土師器は平安時代～中世と思われる壺・高台付壺・甕片・土錘等が出土しており、壺においては底部径が小さいもの、糸切り痕を残すものが比較的多く見られた。須恵器は奈良～平安時代の甕・壺・高壺・壺・高台付壺・蓋等の破片が多量に出土している。その他、遺物包含層の下位で検出した自然流路のからは古墳時代前期の複合口縁の甕片3点、弥生土器の底部片1点が出土している。

今回の調査では人為的な遺構は確認できなかったが、8～12世紀代の多くの遺物を有する遺物包含層と、この下位にて弥生時代～古墳時代の自然流路跡を確認することができた。これらの遺物・自然遺構の検出は、本遺跡の程近くに住居跡等の遺構がある、もしくはあった可能性をより確かなものとし、周辺の古墳・古墳群との関連性、また岡本町一帯の弥生時代以降の様相を知る上で、有効な資料になり得たものと考える。

(秦 愛子・落合昭久)



調査状況

平成19年度調査概要報告

乃木西廻遺跡

I. 周辺の歴史的環境と調査に至る経緯

乃木西廻遺跡は、上乃木4丁目2008番地及び2010番地に所在している。遺構検出面の標高は、13m～16mの低丘陵地で、地元では、この遺跡を含む広い範囲を「丸山」と呼んでいる。周辺には、北に「経塚古墳」東に「向荒神古墳」西南に「下沢遺跡」「乃木二子塚」などの遺跡がある。『乃木郷土誌』(平成3年9月1日 松江市乃木公民館発行)によれば、明治9年の『意宇郡村誌 乃木村』の条に「丸山」の東の「当貫」^{とうくわん}の地に新たに「劫増寺」という時宗の寺が所在することが記録に見えている。地元の話では、この寺はもともと丸山に在ったものを「当貫」に移設したとのことである。

発掘調査地は、現況は畠であるが、この地に宅地造成が計画されたことから松江市教育委員会文化財課で9ヵ所のトレーナーを設定し試掘調査を実施した。その結果、一部のトレーナーで柱穴と見られるビットや2段に掘り込んだ土壤が検出されたことから急遽本調査を実施することになった。総調査面積は約400m²。調査期間は、平成19年4月23日～同年5月28日までである。

II. 各遺構の概要

【主な遺構】

●SI-01 かなり削平を受けているが、推定5.5m×5.5mの隅丸方形の竪穴住居跡。床周囲に幅約14cm、深さ約6cmのV字周溝を掘り込んでいる。4本の主柱穴と1つの中央ビットからなる。柱間は中心で2.6～3.0mを計る。主柱穴は、直径38cm～50cmで、深さは西側のビットで56～66cm、東側で26～40cmを計る。中央ビットは、住居中央から東に寄っていて、堆積土中にかなり炭を含んでいた。また、ビット検出面の上に炭が5～6cmほど堆積していた。住居内周溝は、北側で検出できない箇所があった。また、住居跡の北側に平行するように外に2つのビットがあった。2つとも検出面で直径約50cmあったが、深さ15cmと浅く遺物は出土しなかった。住居跡との位置関係からこの住居跡と関連する可能性も考えられる。この住居跡からの遺物出土量は非常に少なかったが、低脚坏2個体（脚部のみ）、複合口縁の口縁部や壺か甕の胴部と思われる小片が出土している。これらの遺物からSI-01は、古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

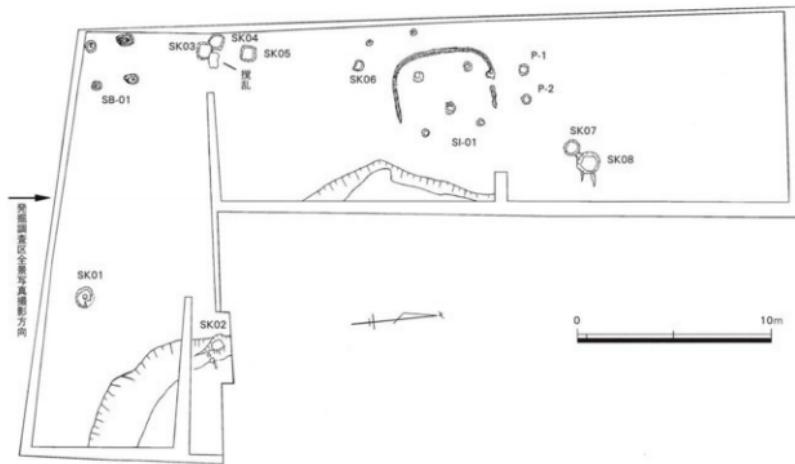
●SB-01 A1区の西側で直径約60cmの4つのビットを検出した。ビットの深さは、浅いもので20cm、深いもので68cmを測る。柱間は中心で、南北約1.8mと1.7m、東西で2.06mを測る。埋土に柱痕跡の残るものもあり掘立柱建物等の一部である可能性が高い。ビット中の埋土より弥生中期と思われる土器の口縁部が出土している。

●SK01 試掘により検出され本調査された土坑。13C代の中国製褐釉四耳壺が多量の土師器皿等とともに出土した。この土坑の詳細については、別に記述する。

●SK02 斜面に丸く掘込んだ土坑。土坑内から、近代の瓦片や19C代の陶器片や手あぶりなどが出土している。手あぶりの中には、2cmぐらいの厚みで均一に灰が残され、割れた擂鉢底部や陶器片が入っていた。丁寧に掘り込んであるが、19C以降の廃棄土坑と考えられる。



発掘調査区全景



- SK03 一辺80cmの方形土壙。深さは1.1mあり、底部は一辺64cmを計る。また、側壁も底部も平らに整形されている。19C代の陶磁器片や鉄釘（角）が出土している。出土遺物や内部の堆積土層から座棺墓壙と考えられる。
- SK04 SK03と同様に一辺80cmの方形に掘込んだ土壙。深さ46cmと浅く、SK03の半分以下の深さである。底部は一辺66cmを測り平らに掘られている。検出状況からSK03より古いと考えられる。土坑内から、土師器皿や角釘等が出土している。出土遺物から座棺墓壙と考えられる。
- SK05 一辺72cmの方形の土坑。底は平らで一辺60cmを測る。深さは、30cmしかなかった。土師器皿が伏せた形で底に密着して出土している。検出状況からSK04と同時期の可能性が高い。
- SK06 菱形の土坑。検出面で一辺36～50cmを測る。底は平らで一辺30cmを測る。深さは約30cm。遺物は出土していない。
- SK07、SK08 円形の土坑。底も丸く掘られている。陶磁器片、瓦片外多数が無秩序に出土しているので19C以降の廐棄土坑と考えられる。「効増寺」との関連が考えられる土坑である。
- P-1、P-2 検出面で直径52cmを測る。浅く、底まで10～14cmしかなかった。ただし、検出面で柱痕跡を確認できた。柱間は、1.5mを測る。遺物はなかった。SI-01に関係するピットの可能性もある。

（まとめ）

この遺跡の遺構に伴った土器の時代は、弥生中期～古墳時代前期、中世、近代と連続性がなく検出された。また、調査面積約400m²という広さと周辺環境から考慮すると、比較的に遺構の数は少ない感じられた。しかし、掘立柱建物跡（SB01）や堅穴住居跡（SI01）が検出されたことは、この遺跡の所在する地形を考える上で大きな意義があった。なぜなら、乃木西廻遺跡は、「丸山」丘陵の東辺に位置していることから、丘陵の更に中央部である本遺跡の西側に、弥生中期～古墳時代にかけての集落跡の存在する可能性が示唆されるからである。

なお、それ以降の遺物は、13世紀代にとぶ。このSK01の性格は非常にわかりにくいが、中国製褐釉四耳壺内の埋土を蛍光X線分析した結果、骨蔵器ではないことが判明している。

その他、各調査区で土坑が検出されたが、四角い堀形をするものは、座棺を納めた19世紀代の墓壙であり、円形のものは近代の廐棄土坑と考えられる。廐棄土坑は、当時この場所にあった『丸山山^{まるやまさん}効増寺』移転の際に、壊れたものを廐棄した土坑である可能性が考えられる。ただし、四角い堀形をするSK03とSK04は、切り合って穿った座棺墓で、SK03が深くSK04が非常に浅いことからSK04を穿った後、削平を受けその後SK03を掘り込んだと考えられる。したがってその時点で、斜面に掘り込んだSK02や近代の遺物を検出したSK07、08などの土坑以外は、かなりの削平を受け遺構面が失われたと考えることができる。

（錦織 廉樹）

SK01について（第2～5図） 調査地の標高14.8～15.2mを測る東向きの斜面で検出された平円形を呈する土坑である。試掘調査に壁面と底部の一部を消失しているが、現況での規模は上縁径104cm、深さ最大47.7cmである。上坑底部は中央に向かって若干の傾斜がついており、中央には上縁径21cm、深さ最大19.5cmを測る小ピットが掘り込まれていた。遺物は土坑の底部から土師器楕10点・皿62点・鍋1点が出土しており、底部中央の小ピット内からは中国製褐釉陶器1点が出土している。

第5図1～45は土師器皿である。同形態であることから62個出土したものうち45個を掲載した。重機により土坑の一部が掘削されていることを考えると、もう少し多い数の皿が埋納されていたと考えられる。いずれも平面は歪な円形であり、外側底部中央は窪んで上げ底気味となっている。調整は口縁部外面が横ナデ、体部外面下半はナデ仕上げで所々に指頭圧痕が残る。焼成は悪く、水洗い時に溶け出すようなものであった。出土状況は、大部分が口縁部を上にした状態で出土しているが、裏向きに置かれているものもあった（第4図参照）。また、多いところでは3枚の皿が重ねられた状態で出土している。法量は口径8.4cm・器高1.8cm前後を測るものである。時期は13世紀と考えられ、市内の石台遺跡からも同様の皿が出土している。

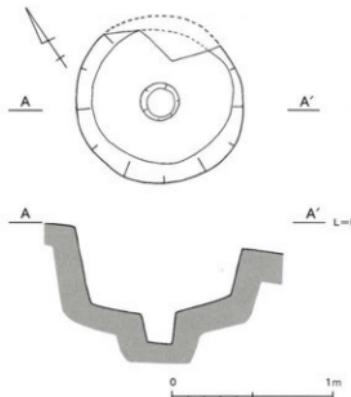
第5図46～55は土師器の楕である。調整は口縁部外面が横ナデであり、底部内外面にはナデ調整が施され所々に指頭圧痕が残る。法量は口径12.8～13.4cm、器高3.3～3.8cm、底径7.0～7.5cmを測る。京都Gタイプに含まれるものであり、13世紀のものと考えられる。

第5図56は土師器の鍋である。平底気味の底部から体部は急角度に立ち上がり、口縁部は「ぐ」の字に屈曲し真っ直ぐに伸びる。調整は体部内外面にハケ目が施されており、使用したものを埋納したようで、底部を中心に煤が付着している。口径34.4cm、器高14.3cmを測る。

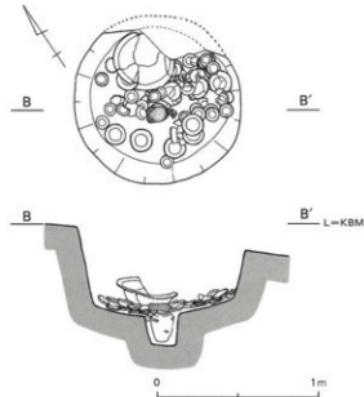
第5図57是中国製褐釉陶器の四耳壺である。土坑中央の小ピット内から自然石で蓋をした状態で出土している。底部に低い高台をもち、体部は緩やかに立ち上がり胴部中段付近に最大径をもつ。頸部は胴部上半から緩やかに窄まり、上端で屈曲して短い口縁がつづく。内外面に白っぽい霜が極めて薄くかかり、外面は無造作に灰褐色の釉を掛け流している。法量は口径9.0cm、底径7.2cm、器高21.7cmを測る。VI-2類に含まれるものであり、13世紀のものと考えられる。

今回検出された土坑は墓壙、経塚、地鎮などの祭祀遺構といった性格が考えられる。四耳壺内部の1/3程度には粘土が堆積しており、土の水洗いを行ったが何も検出されなかった。³⁴また、蛍光X線分析で四耳壺内部の土と外部の土を比較対照したが、検出された元素は鉄(Fe)、マンガン(Mn)、チタン(Ti)であり、何れも人骨に相当すると考えられる成分は検出されなかった。³⁵現時点では性格不明の構造といわざるを得ない。時期は出土した遺物から13世紀代に作られたものと考えられる。

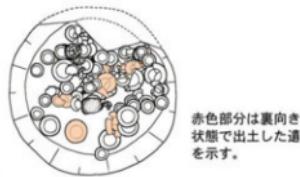
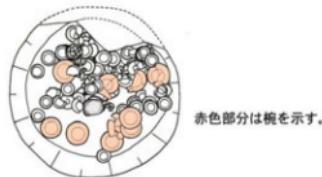
（松江市教育委員会 文化財課 川上 昭一）



第2図 SK01実測図 ($S = \frac{1}{200}$)



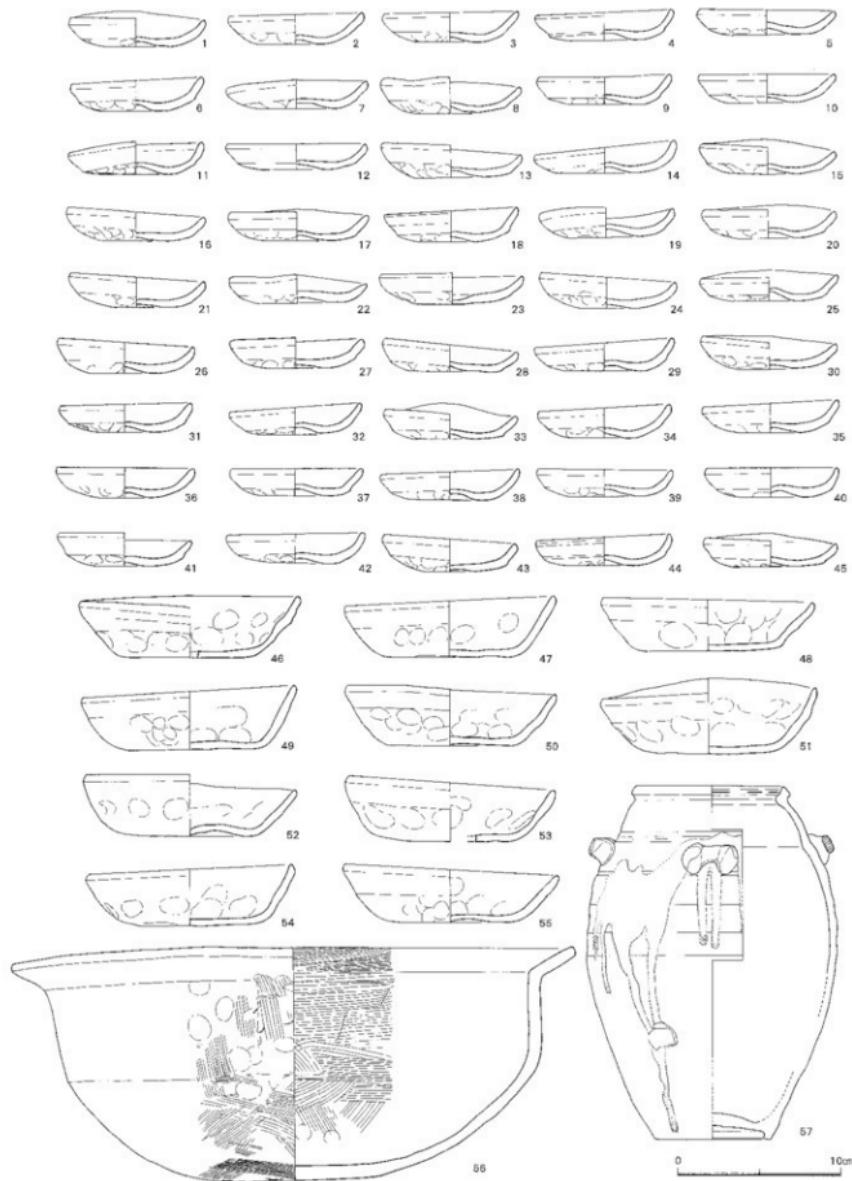
第3図 SK01遺物出土状況実測図
($S = \frac{1}{200}$)



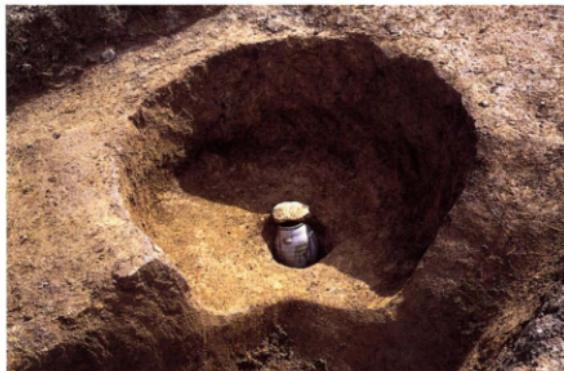
第4図 土師器椀・皿出土状況実測図



SK01遺物出土状況写真



第5図 SK01出土遺物実測図



SK01調査後全景



SK01出土遺物写真

[註] 註1 高槻市教育委員会橋本久和氏のご教示による。

註2 高槻市教育委員会橋本久和氏のご教示による。中世土器研究会編「概説中世の土器・陶磁器」真陽社では、14世紀と記載してあるが、現在では13世紀の古い時期と考えられている。但し、これは京都近郊の偏年になるため、周辺地域ではこれよりも時代が下るかもしれない。

註3 大宰府条坊跡XV 陶磁器の分類編 2000年 太宰府市教育委員会

註4 四耳罐内部の土の取上げと水洗いについては島根県埋蔵文化財センター澤田正明氏にご協力いただいた。

註5 島根県埋蔵文化財調査センター柴崎晶子氏及び奈良大学保存科学研究所西山要一教授にご協力いただいた。

柴崎晶子『今木西廻跡出土四耳罐内部の土と外部の土の蛍光X線分析結果について』2006年6月

【コ ラ ム】

岩汐窯跡の発掘調査～岩汐1号窯・岩汐2号窯について～

岩汐窯跡は、松江市大井町の中海に程近い丘陵の谷間に所在する。松江市内から東へ約6km、中海端まで行き着くと、大井神社を中心とした集落が形成されている。この大井町から南西方向に向かつて低い山並みが広がり、その谷間の1つに、岩汐窯跡がある。

大井窯跡群の中の、岩汐窯跡。こう言えども、早々に理解してもらえるのではないだろうか。岩汐窯跡は、5世紀末～9世紀代、大規模な須恵器生産を行なっていた大井窯跡群の1つである。大井窯跡群が山陰地方の須恵器生産をほぼ独占的に行なっていたことは、既に周知のことである。古墳時代から奈良・平安時代、全盛と衰退を繰り返しながら、大井窯は一大須恵器生産場として名を馳せたことだろう。そしてその中の岩汐窯は、この大規模な須恵器生産地の一端を担っていたに違いない。

現在、岩汐谷は溜め池として利用されている。溜め池は谷地形を生かして作られることが多い。岩汐も例外なくそうであった。しかし他の溜め池と少し違うところは、この谷には窯が作られていた、ということだ。岩汐1号窯・2号窯という呼称で周知の遺跡とされていたが、当然のことながら水に沈んでいた。その状況から観察は不可能かと思われたが、水が抜けてみると、そこには新たな世界が広がっていた。

北側の斜面に現れたのは、窯の断面が露出した2つの須恵器窯、A窯・B窯であった。これは前述した岩汐1号窯・2号窯と思われる(P13 岩汐窯跡参照)。2つの窯は標高20m付近に位置し、両方とも窯の途中で分断されている様子が窺えた。写真を見ていただければわかると思うが、このような状態で窯が残っている例は非常に少なく、また貴重であると言える。2つの窯は共に南北方向を軸としてほぼ平行に作られた半地下式の登り窯であった。断面よりも北側には窯の本体は当時の姿のまま残っているのだが、残念ながら今回は調査範囲外だったため、断面の実測及び観察のみを行なったことをご承知いただきたい。

窯の断面から何がわかるかと言うと、土層の堆積状況により、その窯が何回使われたかがある程度予測出来る点である。もう1つは、その窯が使用されていた年代が出土遺物などから割り出せることだ。前者において、A窯は実に明解な土層堆積を示した。赤い層は焼け酸化した層、青い層は硬く焼け、窯壁片や須恵器を含んでいた。赤と青の層を1セットと考えると、A窯は、少なくとも5回以上の操業が行なわれたと考える。また後者の点では、最終床面と思われる青い層の直上から、須恵器の小片を抜き出すことが出来た。この須恵器は坏身で、口径は10cm以下、立ち上がりはかなり低いという特徴から見て、7世紀前半～後半にかけてのものであろう。この年代は、A窯が最後に操業された時期を考える上で非常に重要な情報となる。B窯も断面からの観察で、少なくとも5回以上の操業、いうことが言えるが、これはあくまでも現段階での意見とさせていただく。B窯内から抜き出した須恵器は坏身の小片で、その様相から6世紀末～7世紀初頭の時期を示す。

A・B窯とともに遺物の出土量は極めて少ないが、両窯が存在し操業されていた時期は、この遺物の

年代から考えることが出来るのではないだろうか。現在、更に詳細に検討中であるので、本報告までにはより明瞭な答えを導き出せることだろう。

調査報告で紹介したSX01という須恵器の山とA・B窯の関連は、現時点では直接的なものがあったとは言えないが、やはり何らかの関係性を見出すことが必要なのではないかと思う。溜め池造成以前の岩汐谷の姿を考えると、A・B窯以外にも多くの窯があったに違いない。それは、SX01から出土した膨大な量の須恵器の破片と窯壁の破片が、如実に示しているのではないかだろうか。池を作るために壊された窯及び灰原の残骸が、何らかの意図を持ってこの場所に積まれたと考えるのが妥当であろう。

現存する2基の窯跡とその他の様々な遺構は、岩汐谷が大井窯の一部として機能していた7世紀代の姿を彷彿とさせる。須恵器生産がもたらした影響力は計り知れず、周囲の人々の生活の基盤となつたに違いない。1400年前の息吹を、同じ場所に立って、作られた須恵器の一片一片から感じることが出来た、濃密な調査だったと言えよう。

(秦 愛子)



岩汐1号窯（A窯）



岩汐2号窯（B窯）

第3章 平成18年度以前の調査

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
H 5	釜代1号墳ほか (寺津11号墳) (北小原3号穴)	西浜佐陀町	前期古墳。主体部2基確認。第2主体部は粘土椁を作り長大な剖竹型木棺で、水銀朱・鏡・玉類出土。第1主体部は現状保存。寺津11号墳は中期の方墳。北小原3号穴は現状保存。	1994刊
H 5	普沢谷横穴群	乃白町	6世紀後半～7世紀前半の12穴の横穴墓群。うち3穴から9体の古人骨出土。	1994刊
H 5	向遺跡	国屋町	余良～平安期の集落跡検出。	1994刊
H 5	論田4号墳	西津田町	(課設立以前の調査報告書作成事業) 古墳時代後期の円墳。S60に調査された論田横穴墓群の調査成果も掲載。	1994刊
H 5	柴尾遺跡	上東川津町	主体部を3基持つ前期古墳と縄文時代後期の黒曜石を中心とする石器生産遺跡。	1994刊
H 5	角森遺跡	八幡町	弥生後期～古墳時代にかけての遺物包含地。	1994刊
H 5	敷居谷古墳群	東牛馬町	5世紀の方墳を含む計3基の方墳検出。後世の祭祀関連の遺物も出土。	1994刊
H 5	山雲国分寺跡	竹矢町	完形で良質な瓦ばかりの瓦窯跡検出。	1995刊
H 5	深山遺跡	大庭町	奈良～平安期の道路状遺構と円形土壙列を検出。	
H 5	岩沙井遺跡ほか	大井町	一字一石経石を含む鐵石経塚検出。	1999刊
H 5	出雲国府跡	大草町	直接国府に関連する遺構は検出されなかった。	
H 5	勝負谷遺跡	大庭町	さいの神と積石塚、古代と考えられる道路状遺構を検出。	
H 5	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物包含層のみ検出。遺構は検出されなかった。	1999刊
H 6	柴尾遺跡ほか (柴尾古墳群)	上東川津町	縄文土器を伴う石器生産遺跡と古墳を調査。前期古墳主体部(剖竹型木棺)からひすい製勾玉、鐵燧出土。ほかに中期以降の古墳1基。	1995刊
H 6	敷居谷古墳群	東牛馬町	中期末の方墳1基。後期初頭の方墳の主体部から太刀・刀子各1点出土。	1995刊
H 6	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物包含層のみ検出。遺構は検出されなかった。	1999刊
H 6	米坂遺跡	西尾町	古墳時代中期から後期初頭の掘立柱建物跡群検出。	1999刊
H 6	舟津横穴群	薦津町	横穴墓2穴と近世貯蔵穴3穴を検出。	1995刊
H 6	筆ノ尾横穴群	東長江町	6世紀後半～7世紀中頃の6穴の横穴墓群。1穴に6体埋葬の横穴墓あり。	1995刊
H 6	寺の前遺跡	山代町	自然流路から布目瓦、陶製鷹尾、円面硯、輸入陶磁器國產陶磁器片が出土。	1995刊
H 6	黒田畠遺跡	大庭町	奈良時代の土壙内から墨書き土器・製埴土器・律令様式の土器が出土し、役所関連の遺跡が近辺にあったことを示す。中世末期の土壙墓6基検出。	1995刊
H 6	二名留遺跡	乃木福富町	古墳時代と近世の遺物包含地	1995刊
H 6	向山1号墳	大庭町	トレンチ調査で木盃掘の石棺式石室発見。	1996刊
H 7	向山古墳群	大庭町	32×20m以上の方墳。埴掘から子持壺出土。石棺式石室内の副葬品は焼き出されており、淡道から前庭にかけて馬具、武器類、玉・須恵器が出土。	1998刊
H 7	遅倉横穴群	朝酌町	6世紀後半を中心に7世紀前半まで続く計5穴の横穴墓。山陰地方初現期タイプ。	1999刊
H 7	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物数片が出土。遺構は検出されなかった。	1999刊
H 7	宮尾古墳群ほか (柴尾遺跡) (柴尾古墓)	西川津町 上東川津町	右器や石鎧のほか、室町後期～安土桃山時代の五輪塔2基のほか、11基の土壙群を検出。	1996刊

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
H7	袋尻遺跡群	乃白町 (現平成町)	堅穴住居7棟、土壙5基、後期古墳2基、近世墓2基などを検出。	1998刊
H7	四王寺跡	山代町	調査範囲が狭く、四工寺との関連性を判断するには至らなかった。	1996刊
H7	大久保遺跡	乃白町	焼土壙、ピットを検出。遺物は数点出土したのみ。	1996刊
H7	川原後谷横穴群	川原町	墓道の一部のみ調査。	1996刊
H7	寺山小田遺跡	矢山町	古墳時代中～後期の集落跡検出。2棟の建物内から玉類出土。	1996刊
H8	小無田II遺跡	山代町	山代郷南新造院(四王寺)の瓦を焼いた8世紀代の瓦窯跡3基を検出。2基は現状保存。	1997刊
H8	米坂古墳群	西尾町	古墳時代中期～後期の方墳7基と埴丘を持たない埋葬施設8基を検出。	1999刊
H8	柴III遺跡	西川津町	弥生時代終末期の下造工房跡を含む堅穴式住居跡を3棟、掘立柱建物跡12棟、柱穴列3条等を検出。	1997刊
H8	袋尻遺跡群	平成町	17ヶ所の調査で、古墳6基、堅穴式住居1棟、掘立柱建物1棟、溝状造構3条、土壙3基、横穴墓3穴、古墓群を検出。	1998刊
H8	松江北東部遺跡	上本庄町	堅穴式住居、掘立柱建物、祭祀跡などを検出。遺物は子持勾玉のほか、大量の上飾質土器片が出土。	1999刊
H9	大佐遺跡群	西持田町	弥生時代終末～古墳時代初頭の墳丘墓を含めた計8基の埋葬施設、上器棺2基、及び戦国時代の戸山城塞跡の一部を検出。	1999刊
H9	米坂古墳群 柴尾遺跡	西尾町	古墳時代中期～後期の古墳群。柴尾遺跡は造構・遺物は確認されなかった。	1999刊
H9	松江北東部遺跡 (荒船遺跡)	上本庄町	縄文時代の有舌尖頭器のほか、中世の掘立柱建物2棟、井戸状造構1基を検出。	1999刊
H9	田和山遺跡群	乃白町	弥生時代前期～中期の3重の環濠を検出。山頂からは柵列と掘立柱建物、古墳前期の墓壙を検出。銅剣形石劍、石鏡、石斧、弥生土器などが出土。	2005予
H10	大手遺跡	手角町	長海川河口の洪水により形成された遺物包含層を調査。漆波容器、木製の櫂は約6000年前のもので、全国でも最古級に属する。	2000刊
H11	久米遺跡群	比津町	古墳時代後期～奈良時代の集落。堅穴式住居1棟、掘立柱建物11棟検出。甕、甑、竈など遺物多数出土。	2000刊
H11	門田遺跡	乃木福富町	弥生時代中期の自然流路、溝、土壙、ピット、杭列などを検出。付近の田和山遺跡との関連で注目される。	2000刊
H11	大坪遺跡	山代町 大草町	溝と小ピットを検出。弥生、中世の土器片と「恐々謹解…」とかかれた木簡が出土。	2001刊
H10 H11	田和山遺跡群	乃白町	環濠外側の斜面より、弥生中期、古墳中期、平安～中世の堅穴式住居跡、掘立柱手建物跡、加工段（掘立柱建物跡？）を検出。	2005刊
H12	北小原古墳群	西浜佐陀町	石棺2基検出（うち1基が現状保存）。石棺内部から小型彷製鏡が出土した。墳裾から土器棺2基検出。	2000刊
H12	田中谷遺跡Ⅲ区	法吉町	掘立柱建物跡と自然河道を検出。遺物は弥生時代後期の土器が中心で、木製品も出土。	2001刊
H12	雲垣遺跡	乃白町	弥生時代中期を中心とした遺物包含地。土器類のほか、木鏡、田下駄などの木製品も出土。	2001刊
H12	大坪遺跡	山代町 大草町	自然流路に挟まれた微高地の存在を土層により確認。調査地北側のトレンチでは木製品出土。	2002刊

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
H12	法吉遺跡	法吉町	自然流路からドングリ集積遺構を検出。縄文土器の細片や黒曜石が出土。	2002刊
H12	舍人遺跡	国屋町 黒田町	城跡に結びつく遺構は確認されなかった。近世以降の遺物が出土。	2002刊
H13	奥山古墳群	上乃木	古墳時代中期頃の古墳群7基のうち6基を調査。土師器、鉄劍、鐵鎌等出土。	2002刊
H13	大坪遺跡	山代町 大草町	自然河道を検出。古墳中期～後期の土器類のほか、木製品も出土。	2002刊
H13	荒隈城跡 (小十太郎地区)	国屋町	荒隈城に関係するものは確認されず、近世以降の古墳群を検出。幕末～近代の陶磁器、土師質土器出土。土壙や杭列を検出。弥生～10世紀代の土器のほか、田下駄などの木製品も出土。	2002刊
H13	法吉遺跡	法吉町	古墳時代中期頃の古墳群7基のうち6基を調査。土師器、鉄劍、鐵鎌等出土。	2002刊
H13	山津窯跡	大井町	窯跡推定地以西の水田を調査。土壤、溝状遺構、旧河道などを検出。古墳～奈良時代の遺物出土。	2006刊
H13	田和山遺跡	乃白町	南側丘陵の東西両斜面を調査。建物跡、土壤、小石棺、自然流水路などを検出。	2005刊
H14	石田遺跡	浜佐田町 鷺津町	弥生中期～奈良時代の堅穴住居や掘立柱建物、墓壙、水溜遺構等を検出。木製品が大量に出土。	2004刊
H14	犬丸遺跡	上大野町	溝2条・土壙3基を検出。	年報VII に掲載
H14	渋ヶ谷遺跡 (揩松地区)	上乃木町	近世道路、連続ビットを持つ道路状遺構や溝状遺構、上幅6～7mの断面V字～逆台形の大溝を検出。	2005刊
H14	田和山遺跡群	乃白町	自然流路跡、掘立柱建物、小石棺を検出。	2005刊
H14	法吉遺跡	法吉町	湿地層から、弥生～10世紀の土器片と木製品が出土。	2004刊
H14	山津遺跡	大井町	古墳時代後期～8世紀前半の須恵器窯跡の他、道路状遺構・土壙等を検出。鶴尾・陶棺庁も出土。	2006刊
H15	薦沢砕跡	法吉町	多くの城郭遺構は検出されなかつたが、周囲の歴史的環境から城郭の一部であった可能性がある。	2005刊
H15	菅田横穴墓群	菅田町	横穴墓が22穴検出され、後背埴丘を持つ横穴墓も検出された。遺物は6～8世紀の後半の須恵器・土師器が出土。古墳1基、土壙1基も検出された。	2005刊
H15	渋ヶ谷遺跡群 (揩松遺跡)	大庭町	近世道路、連続ビットを持つ道路状遺構や溝状遺構、上幅6～7mの断面V字状～逆台形の大溝を検出。	2006刊
H15	山津窯跡	大井町	窯跡と7世紀中～後半の須恵器が出土。	2006刊
H15	井廻古墳	上大野町	分布調査時には石棺の一部が残存していたが、本調査時には石材が全て抜け落ちていた。	年報VIII に掲載
H15	宮ノ前遺跡	持田町	時期不明の堅穴住居跡2棟、土壙1基を検出。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土。	年報VIII に掲載
H15	石田遺跡	浜佐陀町 薺津町	弥生時代の加工段と古墳時代前期の古墳1基を検出した。古墳主体部内から大量の玉類と銅鏡が出土した。	2004刊
H15	荒隈城跡	国屋町	大規模な土木工事による山城遺構を検出。	年報VII に掲載
H16	渋ヶ谷遺跡	大庭町	古墳時代の堅穴住居跡・掘立柱建物跡を検出。焼失住居も確認されている。	2006刊
H16	渋ヶ谷1号窯	大庭町	6世紀代の須恵器窯を検出。窯体内ビットも確認されている。	2006刊
H16	揩松遺跡	大庭町	最大幅16mの溝状遺構等を検出。溝底部は波板凹凸面を成し、古代道路遺構と考えられている。	2006刊
H16	山津窯跡	大井町	前調査で確認した須恵器窯跡と関連するであろう7世紀代の須恵器と窯壁の塊が出土。	2006刊
H16	久傳遺跡	比津町	古墳時代を中心とする加工段状の掘立柱建物跡を7棟検出。	2006刊

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
H16	向山西遺跡	古志原	丘陵頂部付近から弥生後期初頭の竪穴住居跡2棟を検出。うち1棟は樊木溝から住居外に向かう排水溝が確認されている。	2006刊
H17	鵜糞山遺跡他	鹿島町名分	弥生後期初頭の竪穴遺物跡を検出。建物内からは緑色凝灰岩製の管玉未製品4点が確認されており、ここで玉作りがおこなわれたものと想定されている。	2007刊
H17	反山遺跡	春日町	弥生時代の竪穴住居跡3棟、中近世頃の大形土坑、縄文時代～古墳時代の自然流路8条を検出。	2006刊
H17	勝負炎遺跡	乃白町	弥生後期中期の竪穴住居跡を検出。住居に伴うであろう外周溝も合わせて確認されている。	2006刊
H17	矢の原Ⅱ遺跡	上乃木	道路状造溝を2条検出。うち1条の底面には連続してピットが掘り込まれていた。	年報X に掲載
H17	山津遺跡G区	大井町	遺物を包含する自然流路を確認。7世紀末頃を主とする須恵器片と5体の須恵質土馬が出土。	年報X に掲載
H17	松江城下町 (松江裁判所) 試掘調査	母衣町	松江城下町形成時の造成土を確認。	年報X に掲載

埋蔵文化財課年報 XI

2008年発行

編集・発行

財団法人 松江市教育文化振興事業団

印刷

松栄印刷有限会社

島根県松江市西川津町667-1